

美術の窓(123)

春信を読む

大和文華館館長 浅野秀剛

前回の「美術の窓」で、柄にもなく「蕭白を読」んでしまったが、今回は、浮世絵にたちかえって明和期(1764-72)の「鈴木春信」の中判錦絵二点を読みたい。余談だが、前回で述べた「女鉢の木」に依拠した作品は、春信にも何点かあり、近年ようやく女鉢の木のやつしだということが認識されてきたことを申し添えておきたい。

一つ目は、図1(ボストン美術館蔵)の作品で、川辺の桜の木から落ちる花びらを手網で掬おうとする若い娘の図様である。娘は、片方の振袖を持ち上げ、片方を翻らせて、何やら物思いに沈んでいるような風情である。この作品は、「桜を掬う女」あるいは「落花を漁網に受ける美人」などと題されてきたが、謡曲「桜川」に基づいた作品であると考えている。「桜川」のあらすじは以下の通りである。日向国(宮崎県)桜の馬場の少年・桜子は、母を貧しさから救うため、人商人に我が身を売り、その身代金と手紙を母に渡してくれと頼み、国を発つ。母は手紙を見て驚き悲しみ、我が子を探して旅に出る。それから三年の月日が流れる。

図1



桜子は常陸国(茨城県)の磯辺寺に弟子入りし稚児として暮らしており、ある日、住職に伴われて近くの桜川という花の名所にやって来る。そこで、住職と稚児は、桜川に流れる花を掬い網で掬う狂女を見る。狂女が、我が子を求めて日向国からはるばるこの東国までやって来たことを語ると、僧は、この女こそ稚児の母と悟り、二人を引き合わせる。二人は驚き喜び、連れ立って故郷へ帰る。

「桜川」を念頭に春信の錦絵のを見ると、画中の若い娘が、桜花を掬う母に重ねあわされていることは明白であろう。したがって、この作品は「やつし桜川」と題されるべきものである。春信より遙か以前の元禄(1688-1704)頃の、「桜川」に材を求めた作品があるが(図2、大英博物館蔵)、それには、人商人と桜子(娘の姿)も描かれているので、関係がより明確である。右下に二人の童が添えられた意図は判然としなが、
「桜川」に依拠した作品であることは動かない。治兵衛の作を見て、春信の作を見れば、納得していただけると思う。

もう一点は、図3(ウースター美術館蔵)で、舞台造りの御堂の上、欄干近くの廊上で物思い

図2



に沈む若い女性を描いた作品(初版は明和3年の絵暦)である。

この図は、「廻廊」あるいは「清水の舞台で思案する女」と題されてきた。私を含め多くの研究者が、直感で、何か典拠になる物語・図様があり、それを基に描かれたものと考えてきたが、未だそれが解明されていない作品である。この図が「源氏物語」の「玉葛」に基づいているのではないかと思ひ始めたのは、四年前の三重県立美術館での講演の準備をしていた時である。それ以来気になっていたが、思考が進展しそうなもので、この際記しておこうと思う。「玉葛」の巻の前半のあらすじは以下の通りである。源氏は、はかなく絶えた夕顔のことを忘れることができないでいる。その夕顔が生んだ頭中将(「玉葛」の帖の頃は内大臣)との子(玉葛)は、乳母の夫が太宰小式に赴任するのに伴われて筑紫に行き、その地で美しく成長する。太宰小式の死後、玉葛の美しさは次第に噂に上るようになり、求婚者も現われたので、乳母は玉葛と一緒に思い切って上京する。ようやく都に着いた一行は、前途の幸を願い、初瀬(長谷)の観音に徒歩で参詣することを決意、そして三輪山の麓の椿市に辿り着き、そこで宿を取る。その宿で、奇しくも、昔夕顔に仕え、今は紫の上に仕える右近に出会う。喜んだ玉葛、乳母、右

図3



近らは、一緒に参詣することになり、長谷寺の本堂で祈る。その後、玉葛は源氏に引き取られるが、後は割愛。

「玉葛」を念頭に春信の錦絵のを見ると、画中の若い娘を、舞台造りになっている長谷寺の本堂で、行く末を案じて愁いに沈む「玉葛」に重ね合わせることはできないであろうか。図4の歌川豊国画「玉葛晴嵐」(中判錦絵、1792-93頃、クラブホーン・コレクション)は、玉葛の一行が、長谷寺に参詣しているところを描いたものである。ただ、この図は、源氏絵のなかでも少し変わった図様で、通常、廊上の従者たちの図とするところを、その中心に、従者の一人の豊後介を王朝時代の武官のように描いている。この豊後介のところに、玉葛をやつした当世風の娘を配置すれば、春信の絵になる。実は、図3のウースター美術館の画中の墨書は、この錦絵を入手した人が書き加えたもので、「うかりける人をはつせの山嵐よはけしかれとはいのらぬものを」と記されているのである。この歌は千載和歌集に採られている源俊頼朝臣の恋歌である。

したがって、墨書した人は、この作品の舞台が長谷寺であることを知っていたことになる。図4は、春信より後の時代の作品であるが、春信に先行する作品に、図3に直結する図様の作品を見出すことができれば、より説得力が増すが、それが見つからない現在、私のアイデアは推論の域を出ないと言われても仕方がないであろう。

図4



季刊 美のたより No.181

平成25年 1月6日

発行 大和文華館